



(一) 両宮形文深釈

九

- (一) 両宮形文深釈 りょうくうぎょうもんしんしゃく
 - (二) 神代本縁深釈 じんたいほんえんしんしゃく
 - (三) 神法楽観解深法 じんぽうらくかんげしんぽう
- 図書館所蔵、河野文庫一一一号。写本三冊。三冊同体裁、線装本四ツ目綴。藍色表紙。縦二六・八糎、横一九・〇糎。本文料紙、楮紙。
- (一) 表紙題簽に「両宮形文深釈」と墨書。本文墨付十二丁。本文巻頭に「両宮形文深釈」大目沙門撰」とあり、本文首葉に「國學院大學図書館蔵」「阿波國文庫」「不忍文庫」「紫雲文庫」の印記あり。

本文は「天平十四季十一月二日、右大臣正二位橋朝臣諸兄云々」ではじまり、書止は「心平等」無相至極、心垂跡淨心地、諸佛為上主、本来無作佛、自澄大覺位、天長十年八月十三日／両宮形文深釈、大目沙門空海撰」とある。訓点・連続符は本文と同筆。

本書の成立は、元応二年(一三三〇)成立の『類聚神祇本源』に引用が見え、上限とすることができるといふ。「形文」とは、神宮内外両宮本殿の妻飾りに付された文様のことで、これを中心として神宮の神秘説を説いたもの(伊藤聡氏)。

(二) 表紙題簽に「神代本縁深釈」と墨書。本文墨付六丁。本文巻頭「神代本縁深釈」法界原書ノ建大虚空宮離國、毘盧舍那如来、云々」で始まり、「神代本縁深釈」空海撰」で終わる。

本書の概要は天神七代を五輪に配し、各梵号・密号・神号・真言を列記したもの。

(三) 表紙題簽に「神法楽観解神法」と墨書。本文墨付六丁。本文巻頭「神法楽観解深法」大神法法楽法、云々」で始まり、「神法楽観解深法」空海撰」で終わる。

本書の概要は、神前において行われる観想法を記したもので、前半は「奉向宝殿、観想」實相眞如宝莊嚴淨土」後半は「神道観」として、外宮を五輪形と観想するものである。伊藤氏によると、真福寺に「嘉暦二年正月十八日」の年紀を有する古写一本があるといふ。

三冊共に「空海撰」とあるが、後世の仮託。

(一)(二)が密教における神道解釈上の教理を記したものであるのに対し、(三)はその実践としての観想法を記したものである。

伊藤聡氏の真福寺本の解題によると、この河野本を加えて伝本は十八本になるといふ。それらは二巻本、三巻本に分けられ、河野本は三巻本に相当するものとなる。

(三)の書写記文からは、室町前期に神宮内宮の荒木田氏(匡興・守農)と、そこからの出身の僧侶(春瑜)などの中で授受と書写が繰り返されたことが知られ、両部神道と伊勢神道との深い繋がりがうかがえる。

(六戸忠男)

【所収本】

- 『弘法大師全集』五輯(吉川弘文館)に(一)(二)のみ所収、明治四十三年(一九一〇)
- 真福寺本は『真福寺善本叢刊六巻 両部神道集』(臨川書店)所収、平成十一年(一九九九)

【参考文献】

- 右所収本の解題(伊藤聡執筆)
- 門屋温「伊勢、御形文」考『両宮形文深釈』をめぐって」菅原信海編『神仏習合思想の展開』汲古書院、平成八年(一九九六)
- 伊藤聡「或呪歌の変遷を巡って」『説話文学研究』三十二号、平成九年(一九九七)